

第5回 総合計画審議会 議事要旨

■日 時 令和3年6月4日（水）10時00分～12時00分

■場 所 消防局庁舎4階災害対策本部室

■出席者 【委員】

高見沢実委員長

岡本琳南委員、小川喜久雄委員、小原信治委員、門井秀孝委員、菊池匡文委員、菊地萌歌委員、北村明美委員、櫻井聡委員、島由紀子委員、須藤龍一委員、鈴木立也委員、高橋恭子委員、千葉理恵子委員、鳥澤一晃委員、馬場亮委員、宮田丈乃委員、村田範之委員、山本愛子委員

（以上19名、50音順）

（欠席：伊藤秀俊委員、小泉純一委員、相馬希咲委員、牧瀬稔委員、好村明理彩委員）

【事務局】

平澤経営企画部長、宮川都市戦略課長、太田主査、山中

■傍聴者 市議会議員4名

■議事内容

- 1 次期基本構想・基本計画草稿について
- 2 高校生アンケートについて
- 3 生涯学習に係るアンケートについて
- 4 今後のスケジュールについて
- 5 その他

10時00分 開 会

- 1 次期基本構想・基本計画草稿について
- 2 高校生アンケートについて

(事務局)

- ・前回の総合計画審議会での皆様のご議論を踏まえ、【資料1 次期基本構想・基本計画草稿（たたき台）】を修正したので、その内容をご説明する。
- ・計画の修正にあたっては、事務局が単独で修正しているのではなく、いただいた意見を各部代表の若手メンバーで構成しているプロジェクト会議で共有、議論し、表現を検討した上で、各部局に照会をかけて最終的に修正している。このことで、単に文字の修正だけではなく、皆様の考えの市役所全体での浸透を図っている。
- ・市内の高校1、2年生を対象に、横須賀の未来についてどのような考えを持っているのかを調べるアンケートを行ったので、【資料2 高校生アンケートについて】をご説明する。なお、高校生の意見は草稿の「未来の物語」に反映している。

～ 資料1、2に沿って事務局から説明を行った ～

(高見沢委員長)

- ・まず、第3章の内容について、議論してきたものがどう反映されたのか、これでいいのかどうかということでご意見があれば、あるいは、何か違う角度でのコメントでも結構なのでご発言をお願いします。
- ・私からは、ひと、まち、しごと、環境で、大きくりのページがあるが、そのページが認識しづらかった。最終的なデザインのことかもしれないが、分かりにくかったというのがある。

(事務局)

- ・パート分けなどで分かりづらいところは、今後のデザインで検討する。

(菊池匡委員)

- ・海洋の“稼ぐ”という表現について、以前に委員の方から違和感が示されていたが、事務局の強い想いで残ったのではないかと思う。ただ、まだ少し違和感がある。やはり、海洋というのは横須賀にとって重要な地域資源であり、陸だけではなく海も含めて横須賀だと思う。しかし、今まで海に対して注力が欠けていて、これから未来に向かって海の可能性を探るということが非常に重要になる中で、稼ぐことも含めて可能性を拓くというのが全般のイメージなのかなと思う。「稼ぐ。そして守る」という表現は、例えば「未来を拓く。そして守る」というよう

に変えた方が、海洋の未来性を的確に市民の方々に伝えられるという印象を持ったので改めて提案させていただきたい。

(事務局)

- ・“稼ぐ”という表現については事務局の想いもあるが市議会の特別委員会でのご提案があり、今の現段階では残している。とは言っても、この総合計画審議会も市民の皆様が参加し、その立場で“稼ぐ”という表現が少し強い、違和感があるということなので、どういう表現がいいか検討させていただきたい。

(小原委員)

- ・私も“稼ぐ”には違和感があった。“稼ぐ”というのを事業者の方が前向きにとらえると、稼ぐために少くも自然環境を破壊してもいいだろうということに繋がりがねない。そういうところで“稼ぐ”という言葉に違和感があるのだと思う。海に対する、畏怖の念のようなことが入っていればいいような気がする。おそらく、“稼がせていただく”というようなニュアンスかと思うが、そういう事が入っていれば、“稼ぐ”という行動は構わないと思う。“稼がせていただく”というとすごく大そうな言葉だが、そういうことなのかなと思う。

(村田委員)

- ・稼ぐと言うと少しドロドロしている感じがして、活かすとかそういう方がいいと思う。横須賀の海は非常にポテンシャルが高く、その海を活かすことは何も経済面だけではないので、そういう表現が適切ではないか。

(高見沢委員長)

- ・ニュアンスも広がってきたので、それを踏まえてご検討いただければと思う。

(岡本委員)

- ・いくつかリモート化というワードが出てくると思うが、リモート化をどう進めていくかといった内容は『6 都市基盤・まちづくり』に当たるのか。ICT化、AI化を進めていきますというような文言があまり見つけられなかったので、記載があれば教えてほしい。

(事務局)

- ・リモート化は行政が主体的に進めていくものもあるが、世の中の流れとしてリモート化が進んでいるので、その流れにそって行政はこう考えていくという趣旨の記載もある。
- ・『1 福祉』では政策方針案の3の③で、福祉の現場でICTツールを活用するや、『2 子育て・教育』では、政策方針案の2の④でICTの導入、4の②でICT環境を整備する、『3 健康・医療』の1の①にも記載があり、色々な場でICTを積極的に活用し、人の負担を軽減すると同時にサービスの向上を努めていくということをちりばめている。
- ・リモートという表現はそれほど多くは使っていないくて、ICT技術をいろんな分

野に導入して、活用していくというような考えで計画を作っている。

(岡本委員)

- ・確かにICTを活用していくのはどの分野にも関わることなので、非常に重要だと思う。それを導入するにあたり、デジタルに強い人を育成していくという観点も必要だと思う。特に、コロナ禍によりオンライン化が進んだが、この総合計画審議会では緊急事態宣言下で、オンラインではなく書面会議になった。他の自治体や教育機関ではオンラインでどうやっていくかを早い時期から考えているところもあったと思う。その際に、ICTとかデジタルを活用していける人が必要で、横須賀にはICTに強い企業もあると思うので、そのあたりを進めていくとより良いのではないかと思う。

(事務局)

- ・市役所の職員のICTの取組みで言えば、『市政運営の基本姿勢』の「超高効率で健全な行政運営を行う自治体であること」あるいは、働き方、リモートワークといった記載をしている。
- ・各事業所や福祉現場などについては、行政が入り込んでやるということではないので、支援という立場で進めていくべきところは進めていきたいと考えている。

(高見沢委員長)

- ・4章の「市政運営の基本姿勢」は、審議対象として議論したか。

(事務局)

- ・4章に関しては、ここに特化して議論はしていないが、全体の議論の中でご意見をいただいた。

(高見沢委員長)

- ・4章について見ると、市役所が頑張ります、サービスを提供するという視点だけで、市民全体に力をつける、いわゆるエンパワーメントの視点がなく、行政にお任せくださいという時代でもないと思う。そうした意味で、この4章の書きぶりがいいのかどうか、今からでも議論、意見があれば出していただくといいと思う。

(事務局)

- ・そういう意味では、4章は市政運営という形で記載している。例えば『7 産業振興』では、政策方針案でDXを進める、人材育成を図るといった記載や、『2 子育て・教育』では、ICT環境の整備と記載し、各分野でエンパワーメントを意識しており、4章で市全体の話をするというふうには考えていない。
- ・また、20 ページで「それぞれの主体に求められる姿勢」を記載しており、そこで、人口減少が進む中で、行政はサイズダウンし最新の技術を使ってサービスを向上させていくことや、職員の姿勢に加え、地域団体、事業者等の皆様にもっていただきたい姿勢についても記載している。

(高見沢委員長)

- ・今から議論する第1章の基本的な考え方にも関係するかもしれないので、そういう面も失わないように見ていきたいと思う。

(小原委員)

- ・リモートワークに関する記述について、オンライン化が急速に進み、1年が経ち、リモートワークの負の部分や、家庭の中での歪みみたいなものが顕在化してきていて、一概に、合理性だけで全てにおいてリモート化を進めるというのは、もはや違うフェーズに入っている感じがする。そういう負の部分も救えるように、遠隔医療などはともかく、必ずしもオンラインが正解ではないということも踏まえた上で、リモートワークということを検討したほうがいいと思う。

(事務局)

- ・『市政運営の基本姿勢』に関しては市役所の職員の働き方で、記載の通りリモートワークも含め個々に応じたワークスタイルのことで、当然、対面のサービスをなくすわけにはいかないもので、それはきちんとやって参りたいと思う。
- ・市役所以外の部分に関しては、民間企業の方の中でもプラスの部分だけではないというのはおっしゃる通りで、具体的にリモートワークをどんどん進めるということは、私どもも考えてなく、記載していないと思うが気をつけたいと思う。

(小川委員)

- ・『8 観光・文化』の政策方針案の3文化の伝承と醸成について、文化は非常に多岐に渡っていて、色々な形で地域の中に伝承されている。しかし、これをその文化ごとの一つひとつの団体だけに任せると衰退してしまう。担い手がいなくなって消えてしまう時がある。なので、地域ごとに文化を継承、発展させるまとめ役みたいなものがあるといいと思う。例えば文化振興懇話会とかがあったので、地域の文化を統括して伝承させていくという目的を持った団体ができると非常にいいのではないかと。その辺り、政策に書いていただけるとありがたい。

(事務局)

- ・地域ごとの仕組みや、そういったものに関しては分野別計画として文化振興基本計画があるので、いただいたご意見はその担当部署に伝えて、分野別計画に盛り込めるものは盛り込んでいきたいと思う。

(高橋委員)

- ・非常に分かりやすく、メッセージが伝わりやすい文章に変わっていると思う。
- ・全体的なことで、今後、修正されると思うが、横文字や英語表記が多い。例えばIoTやICT、BCPなど、こういった表記は分かりにくいので、用語の説明が後につくのか。併せて表記の仕方について、DXでは括弧してデジタルトランスフォーメーションと入っているが、例えば、BCPはそのままなので、全体を見渡してそういう表記の統一も、読みやすい形にできればと思う。

(事務局)

- ・それぞれの語に説明をつけるのか、用語集のような形でまとめて示すのかは、分かりやすい方を検討していきたいと思う。

(高見沢委員長)

- ・次に、草稿の「市の未来像」、「未来像実現に向けて持っていたい価値観」について議論をしたいと思う。事務局に説明をお願いします。

(事務局)

- ・「市の未来像」について、事務局の案として3つのパターンを示した。「パターン1」は、未来に向かって進んでいくスローガンの表現とした場合の例。「パターン2」は、すべての人になじみやすく、共有しやすい表現とした場合の例。「パターン3」は、横須賀の都市の姿を想起させる表現とした場合の例となっている。
- ・「未来像実現に向けて持っていたい価値観」は、未来像を実現するために、横須賀に関わるすべての人と共有したい大切な価値観、忘れてはいけない心として1点目「個性を大事にします」、2点目「変革、創造し続けます」、3点目「思いやりを持ち続けます」の3点をたたき台として挙げた。
- ・本日は、記載の事務局案に縛られず横須賀の未来を示していく上で、必要だと考えるキーワードや考え、想いについてご意見をいただきたい。今後、この審議会での意見も踏まえ、市議会特別委員会での議論を経て決めていきたいと思う。

(高見沢委員長)

- ・この場でどの案がいいと決めるわけではなく、何でも結構なのでこれがいいとか、そうじゃないのがいいとか、色々な意見をお出しいただきたい。

(櫻井委員)

- ・2030年のあるべき姿というのが一番重要。そこで、2030年を考えると高校生アンケートの対象者が横須賀市の担い手になっていく。このアンケートの「10年後、横須賀市がどんなまちになっていたらいいと思いますか。」という設問での回答が、この子たちが大切にしたいもの、もしくは横須賀で失われていきそうなものだと思う。それが2030年の横須賀のあるべき姿に近い。例えば、住みやすいまち、治安が良い、綺麗、自然豊かとか。これは自然が失われていくことを危惧しているのか、治安が少し悪くなっていくのを危惧しているのか。また住みやすいまちであって欲しいという願いとか。これらを横須賀市のあるべき姿としてとらえていくのがいいと思う。

(事務局)

- ・あえて言うと、3つのパターンのうちどれに近いか。あるいは、どれでもないか。

(櫻井委員)

- ・パターン1が一番気に入っている。届きやすい。パターン2の「多様な人になる」というのは引かかる。多様性は尊重するものであって、多様な人になるという表現は少しおかしいと思う。色々な多様性があるが、そういった人たちも尊重するというのが一つの多様性のとらえ方なので、多様な人になるというのは少し違うかなど。色々な人、色々な考え方があっていいというとらえ方にしたい。

(事務局)

- ・多様な人になるというのは、少し表現が決めつけているので多様性を認める、多様な人を認めるまちということになると思う。ただ、この案はこのままということではなくて、全く違うものになる可能性もあるので、こういう言葉を使うのであれば今のことは留意したいと思う。
- ・高校生のことはおっしゃる通りだが、ここにいらっしゃる皆様、20代の方から幅広い年齢の方がいらっしゃって、その方たちが思う2030年の横須賀というものを行政としては示す必要があると思う。高校生アンケートの結果も踏まえつつ、幅広い年齢の方のあるべき横須賀というものに収斂させていきたいと思う。

(小原委員)

- ・横須賀の未来を誰が作るのかということを考えて各分野を読んでみると、一人ひとりが作るんだということが分かる。そのコンセプトは「3 それぞれの主体に求められる姿勢」で掲げられているが、未来像の案では、まちが主語になっていたり、私たちみんなとなっていて、どこか人任せに感じられたり、行政がサービスをしてくれるというふうに受け取られかねない感じがある。言葉としては、未来に向かって一人ひとりの行動指針になったり、安心して繋がったりするような、自分が主体的に作るものであるということをも自分ごととして考えられるようなスローガンが、各分野を表すにはふさわしいと思う。

(事務局)

- ・一般的に行政計画における未来像というのは、2030年の横須賀がどういう形になっていたらいいかという、都市のあり方みたいなものを示すケースが多い。小原委員が言われたように、未来像に向かって、行政、市民や事業者の皆様が各々どういうことをしていくかというのが、その後を書いてあるという形が多く、それにこだわるわけではないが、ご意見として承らせていただきたいと思う。

(菊地萌委員)

- ・パターン2の「楽しいがしごとなる」というのは、綺麗ごと聞こえてしまう。自分が楽しくて相手も楽しくて、そこから仕事生まれることは、すごい素敵なことだと思うが、高校生の時の自分を振り返っても、楽しいことを仕事にしようと思っている人が周りにいたかということ、そんなこともないような気がして、楽しいというワードよりも、やりがいなどの方がしっくりくる。

(事務局)

- ・楽しいだけでは仕事は成り立たず、おっしゃっていただいたように、人のためになることだと思うので、このような表現を使うのであればご意見を踏まえたい。

(鈴木委員)

- ・高校生アンケートについて、当たり前のこと、誰でも思うことが書いてあると思う。例えば、東京湾に一つしかない猿島をどうにかするとか、そういうことが出

てくればいい。綺麗な住みよいまちだとか、自然豊かな、当たり前のことだけで、もっと奇抜に富んだ、夢を語れるような若者が出て欲しい。

(島委員)

- ・「国際海の手文化都市」は、横須賀市が今まで使ってきたスローガンかと思うが、次のビジョンでは、この言葉の取り扱いはどうするのか。もう使わないのかどうかを確認したい。横須賀のキャッチフレーズとして外部にも発信していたと思うので、個人的にはそれが全く消えてしまうのは寂しいと思う。できれば、どちらかの施策の中にも、このような言葉は何年も先に一貫したキーワードとしてあってもいいのではないかと思うので、この取り扱いについてご説明をいただきたい。

(事務局)

- ・今、それは決まっていない。案の中から選ぶということではないが、パターン3では「国際海洋文化都市」という言葉も入れている。ただ、今回のビジョンは全体を通して前回までの基本構想とは、スタイルや書いてある内容がかなり違う。なので、今まで使っていた国際海の手文化都市という言葉そのまま生かすのか、あるいは国際海洋文化都市という言葉を使うのか、それはやめてパターン1、2にあるようなやわらかい表現を使うのかというのは、現時点ではフリーハンド。島委員の国際海の手文化都市がいいというご意見は、ご意見として承って検討させていただきたいと思う。

(鳥澤委員)

- ・高校生アンケートでは、当たり前のことが出ているという意見があった。資料2の全体的な傾向というのは多く出てきた意見で、少ない意見は特に注目した意見として、個性的な未来の話とか、少しとがったような面白い意見が出ている。
- ・資料1の分野別未来像では、事務局から今までの積み重ねの説明があったように、大多数の意見だけでなく、小さな意見も拾い上げながら、それらを色々な所にちりばめているのが感じられ、例えば、高校生アンケートでの個別のきらっと光るような面白い回答も、分野別未来像には反映されているような印象を受けた。
- ・一方、市の未来像の案を見ると、分野別未来像を集約するような形になっているが、分野別未来像で書かれていたことが市の未来像の方では薄まっているというか、集約して代表的なものを書くという位置付けは理解できるが、分野別未来像では現時点で去年1年間のコロナ禍での色々な経験を踏まえて、2030年を思い描いていることが含まれているような気がするが、市の未来像では極端な言い方をすれば、10年前に、その10年後を思い描いたようなことしか書いてないのではないか。すごく当たり前のこと書いてあるような気がして、市の未来像の方には、分野別未来像にあるような、未来感があまり感じられない気がした。それはそれでいいと、今までとこれからは変わらないところもあって、それがまず市の未来像としてあるんだということであればいいが、分野別未来像を集約した位

置付けの割には未来感がないというか、現時点で 10 年後を描いているというニュアンスがあまり反映されてないような印象を受けた。

(高見沢委員長)

- ・2030 年は、未来というよりも明日という感じの近さ。最近、色々なところで 2045 年とか、そういうビジョンを作ったりもするので、2030 年と言われるとあまり未来じゃないことを書いてしまいがち。横須賀市としては、この 1 章というのは、2030 年なのか 2045 年を描いておいて、実際には後ろの方で 2030 年について書いていく、そんなような構成にしたいのか、その辺りの考え方はどうか。

(事務局)

- ・どちらかというご質問であれば、2030 年の未来像。2030 年に横須賀市がこういうまちになっている。それは、事象として形になっているという場合もあれば、意識としてなっているという場合もあると思う。パターン 1、2、3 では、人の気持ち的なことを書いているパターンもあり、形になっているパターンもある。事務局としてはどちらでもいいというわけではないが、2030 年に横須賀市があるべき形というのがキャッチフレーズであって、その下に書いてある文章では 2030 年の姿に向かって、みんなが気持ちを一つにして進んでいく。こういう人が横須賀の中で 2030 年こうやって暮らしていく、生きていくというようにことを書いているつもり。あまり未来的ではないというご指摘はそう思う。

(鳥澤委員)

- ・私が言いたかったのは、分野別未来像では今だから感じられていることがすごく反映されているが、市の未来像の方はそういう感じではなくて、2010 年の時点で 2020 年を書いても、これとあまり変わらない内容になるような気がする。今だから、2021 年の時点だからこそ書ける 2030 年の像という形になっていないのではないか。当たり前のことが、前から言われているようなことが書かれているという、市の全体の未来像にはそういう印象があるが、分野別未来像はそうではなく、今だから書けることが書かれているので、両者がかけ離れているような感じがする。

(事務局)

- ・鳥澤委員がおっしゃられたことはもっともだと思う。ただ一方で、分野別未来像ではもちろん未来を見据えているが、やはり根本的で横須賀ならではの、元々身近にあるものが非常に大切である。例えば、パターン 1 は元々横須賀にあるものが大切だと、それがコロナ禍でより重要なことを意識したということで、表現としては古臭いかもしれないが、今の時代だからこそ、こういったものが大切だという思いはそれぞれのパターンで入れている。
- ・事務局としては、ここは普遍的な価値観で 2030 年にもこういうまちであって欲しいということを書いている。鳥澤委員のおっしゃることはよくわかるので、普

遍的な価値観を描きつつも、3章に書いてあるような未来に向けたことが書けるように、固執することなくご意見として承りたいと思う。

(千葉委員)

- ・根本的な質問だが、これを読む方、目にする方の視点というのはどういう形を考えて、こういうものを作るのかという疑問を持っている。
- ・未来像は、これを読んだとき10年後、このまちってきつこうなるんだろうとか、わくわくしたりドキドキしたり期待したりという観点とか、そういうものを含めてこういうものを作られているのか。それとも、こうあって欲しい、今の横須賀にはこんなにいいところがあるんだよという方が、比重が強いのかというのを、スローガンを見て思った。
- ・10年後の未来像で、皆さんのお気持ち、一人にしないまちや、豊かさ、形には見えないもののスローガンは大事だと思う。しかし、未来ということになると、コロナ禍でITなどが急速に発展し、予測としてはすごいスピードで情報化の波が来ているわけで、それを市としてどう活用していくのか。活用した上で、人間との共存共栄、人間の価値観を、市としてどうバランスをとって欲しいのか。そういうところを踏まえて未来像を考えるとと思う。
- ・このスローガンだけを目にすると、今までもそうだった、皆さんそういう気持ちを持ってますよねという念押しのようなスローガンになってしまって、IT、ICT、IoT、ロボット、AIとかそういうものと、横須賀市民の共存共栄みたいなスローガンを打ち出せないのか。未来像というところだけにフォーカスするとそうあったらいいと思う。
- ・先ほどの質問は、それを見る方の立場の視点というのはどのような形で、この中にあるのかをお聞きしたい。

(事務局)

- ・見る方の視点の意味が、はっきり理解できてないかもしれないが、これは横須賀市の2030年に向けた行政計画で、自治体である横須賀市が市民に向けたメッセージや宣言だと思っている。その最初に出てくる横須賀市の未来像というのは、横須賀市民40万人全員に向けて、市の考え、想いをお伝えする、市役所はこういうふうにしていくしていきたいと思っています。皆さんも一緒に進んでいきましょうということだと思う。なので、例えばIoTとかICTということはこの中に入れるというのは、私としては逆に違和感があり、それは分野別未来像や「3それぞれの主体に求められる姿勢」に入れていくべきものかと思う。

(千葉委員)

- ・理解はした。ただ、やはり横須賀市がこのままではいけない。重大な課題を色々と抱えている中で、同じような形の行政指針というもので、それを協力してくださいという気持ちで伝わるのかという不安はある。

- ・本当に、横須賀市を変えていきたい。世界で一つのまちという思いで打ち出すとすれば、インパクトは強いかもしれないが、そういう行政指針というものを打ち出さないと改革、変革というものになるのか。私も行政のことを完全に理解しているわけではないが、市民目線で協力できるのか。色々な立場があるのは承知しているが、ここでインパクトをつけて、色々な所で情報化が進んでいるので、そういうこと入れるというのは、2030年の未来に向けては必要かと個人的には思っている。

(事務局)

- ・千葉委員のご意見は承知した。ただ、市民40万人の中には改革を望む方もいれば望まない方もいる。今の安心安全な暮らしをこのまま守って欲しい。高校生たちのように、平和で住みやすいまちを継続して欲しい。そういう、色々な市民のニーズがあることを包含した中で、市としてどういうまちを作っていくのかというのがこの未来像の部分である。当然、おっしゃられたようなことは大事な視点で、改革しなきゃいけない部分を改革していくということは、やはり後半に書いていくことだと思う。また、市はこういうふうに思っているから、ついてきてくださいという、上から目線で言っているわけではなく、市が2030年にこういうまちをつくっていききたいという想いを宣言しているものだと認識している。委員のおっしゃることは承知したので、計画全体の中で盛り込んでいきたいと思う。

(村田委員)

- ・パターン3の国際海洋文化都市の国際という意味が、国際的な雰囲気だとか市民交流くらいしか記載がなく、これまでも総合計画審議会では国際について、ほぼ議論がなかった。この国際を使うのであれば、国際という言葉でどういうふうにしていきたいのかというようなことをもっと書き込んでいく必要があると思う。

(北村委員)

- ・一市民として、やはり変わって欲しくないものはたくさんあるが、変わらなきゃいけないということも自覚していると思うので、そういった内容は市の未来像のパターン1の中には含まれているのではないかという印象を受けた。
- ・本当に色々な想いがあるので、一つにはならないと思うが、大切にしたいものもあるし変えなきゃいけないこともあるというのは、みんな自覚しているのではないかと思う。

(高見沢委員長)

- ・私が見て思うのは、パターン1はプロセス。特に変化を力にするという横須賀市民が持っている特質、長所を大切にしていけば、どんな変化でも頑張りますよということで、中身はあまり関係ない言い方だと思う。パターン2は、いわゆる総合計画型でこれもやりますあれもやりますというやつ。3番目はビジョン形で、陳腐であるみたいな話が多いが、言いたいことはそういうことを打ち出したいと

いうこと。

(北村委員)

- ・先ほど、その先の方がもっと未来だという話もあったので、その過程だということでは1がいいかと思う。

(高見沢委員長)

- ・3を書こうとするとつらいと思う。ICTなど書きたくなるが、1であれば、すでに持っているものを大切に伸ばしていこうということ。

(菊池匡委員)

- ・概念的になってしまうが、計画を市民の方々に理解してもらい、一緒に歩んでいただくとすると、まず「共感」を覚えてもらわないといけない。そして、今、議論している1章は幹になる部分なので非常に重要なところだと思っている。それで、幹を作るためにはやはり根っこが必要で、その根っこが共感を覚えるためのベースにならなきゃいけないんじゃないかと思う。
- ・そう考えたときに、根っことして何があるかということ、横須賀は半島にあるので、新陳代謝が非常に活発でない都市。それでいて中核市である。実は、これを表現していると思ったのは「未来像実現に向けて持っていたい価値観」に、田舎過ぎず都会すぎないというのがすごく良い表現で、私もそういうふうに思っている。何を言いたいかということ横須賀の人たちには、ずっと連綿と続いている風土というものがあって、その風土がどういうふうに作られてきたかということ田舎過ぎず都会すぎないまちの中で作られてきている。
- ・皆さんの意見の中にも、共通しているのは横須賀のことが好きということ。だから、横須賀を愛する心というか、市民のスピリッツ、そこに照準を合わせないとなかなか共感を得られないんじゃないかと思う。変わるところは変わって良い、幹から枝を出すのはいいが、やはり根っこは何なのかということを確認しておかないと、市民の方の共感というのは得られないんじゃないかと思う。
- ・そこをどう表現するかは分からないが、高校生アンケートの中でも特に注目した回答の中に、ぬくもりだとか繋がりだとか助け合いだとか仲よしだとか、すごくその風土の中で培われた横須賀を愛する心、ここは崩したくないというような表現があるので、まずそこで横須賀市民の方々の心を掴んで、それをもとにどう変えていくかっていうストーリーがわかるような表現が、この幹には必要じゃないか。具体的にこの方がいいというのではないが、概念的な印象としてそう思った。

(馬場委員)

- ・分野別未来像に色々と未来の細かいことが書いてあるので、市の未来像の方はコンテンツというよりは、コンセプト。概念という形でとらえなきゃいけないと思う。横須賀市がどういうまちかというのを一言で説明できるような、未来像という横須賀市のあるべき形が考えられればいい。例えば、ブータンという国では、

世界一幸せな国と言っている。どこが幸せなのかは、みんな知らないけどみんなそのことは知ってるというふうになっているので、横須賀はどういうまちかというところを一言で表せられるような、どういうふうになりたいんだという形を表せられることを、ここの未来像の幹の部分に概念として記載できればいいと思う。

(高見沢委員長)

- ・特にパターン1、2、3どれがいいというわけではなく、そのようなコンセプトがしっかりしてれば良いということか。

(馬場委員)

- ・そう考えると、パターン1がスローガン的なので、変化を力にというのは違和感が少しあるが、考え方としてはパターン1。

(島委員)

- ・当社も中期計画を立てているが、やはりキーワードがあると思う。例えば、今回なら多様性や環境共生やE S G。企業としては、そういう言葉を提示していかなければ計画にはならないということを社内の中で言われ策定した。それは、企業でも行政でも、今の世の中の施策としては、共通して必要なものではないかと思う。もちろんそれを踏まえた中で、各施策が入っているが、未来像にもそういったキーワードなり、それをもとに分野別の未来像があるんだというところを、先ほどのICTもそうだが、総括したところでも、そういったキーワードを意識しながら、市民の方にもわかりやすい具体的な自然とか、そういったものは必要だと思うが、何かそのもう一つ上位にあるキーワードなり単語を、パターン1でも2でも3でも入れていくべきではないかと思う。

(宮田委員)

- ・「変化を力に進むまち。」とあるが、このような変化を求めているというよりは、豊かな発想が生まれるまちというような印象を強く持ちたいと思う。「いつの日か横須賀に帰ってきたくなる。」や「街を去る若者もおり、空き家は更に増加しているかもしれない。」ではなく、今、横須賀は活気が少ないと思うがもっと活力ある横須賀、そして豊かなふるさとに2030年はなっていた方がよいと思う。そして、その中で若者、子どもたちがにぎわう街として、個人の能力、個性を生かす。そういう自分を生かせるまちに変化してますよ。という方がいい気がする。

(高見沢委員長)

- ・3つのパターンのうち、どのような切り口がいいかという、1だというのが前提ということか。

(宮田委員)

- ・その通り。

(高見沢委員長)

- ・例えば、「変化を力に進むまち」、「豊かな発想が生まれるまち」、「何とかのまち」

のように、3つでもいいし、考え方はこういう切り口がいいということだと思う。

(岡本委員)

- ・パターン1から3を読むと、パターン2は市民の生活に根差したというようなコンセプトで書かれたのかと思う。パターン3は都市の姿ということもあり固めの印象を受けた。一番ワクワクするのは、文体の影響もあるがパターン1と感じた。
- ・ただ、パターン1は最初の方、悲観的な表現が見られて少しもったいない。気持ちとしては、今、こういう課題を抱えてるけれども前に進んでいくエネルギーがあるんだということを表したかったと思うし、それは伝わってくるが「未来に悲観する40万人より」などは、極端な印象を受けたのでそのあたりの表現については今後、精査されると思うが、少し考えてもいいのかなというところ。
- ・先ほど、高校生アンケートで当たり前なことが書かれているというようなご発言があったが、回答者は当たり前だと思っていないからこう書くと思う。普段、自然に囲まれていたとしても、それに対して、いいなとか好きだなというふうにプラスアルファの気持ちがあるからこそ、アンケートで回答するということでもあるので、当たり前で片付けるのではなくて、普段意識していないけど実は重要だというような視点で見てもいいのかと思う。

(門井委員)

- ・個人的には、パターン1の「変化を力に進むまち。」というのが一番好き。どういう形であろうと、能動的でも受動的でも、変化は必ず起こるものだと思う。
- ・その上で重要だと思うのが、リテラシーやモラルというふうに表現していいかわからないが、変化していく上で善悪の区別をしっかりとつけないといけないと考えている。色々な変わり方があり、その善悪の区別をしっかりとつけた上で、変わっていく必要があると思うので、その記載というのは当たり前なことすぎて、ないのかもしれないが、改めて考える必要がある。

(事務局)

- ・ご意見ありがとうございました。色々なご意見を受けとめきれなかったというのが正直なところだが、未来や改革があまり感じられないといったことを踏まえ、共感やコンセプト、キーワードといったことをもう少しメッセージとして市民の方に伝えられるようにしていきたいと思う。
- ・ただ冒頭に委員長からおっしゃっていただいたようにパターンの中のどれか一つを選ぶというふうには思っていなく、例えば1と2が組み合わせあったものになるなど、そういったところも、事務局に預けていただくということをお許しいただき、検討を重ねていきたいと思う。

3 生涯学習にかかるアンケートについて

4 今後のスケジュールについて

(事務局)

- ・人生 100 年時代においては、いくつになっても学び続けることがより重要になることを想定し、多くの人々が意欲的に学ぶ機運を高めることや、機会の創出を目指し、アンケートを行ったので、【資料 3 生涯学習に係るアンケートについて】をご説明する。
- ・今後のスケジュールに関して、【資料 4 今後のスケジュールについて】をご説明する。

～ 資料 3、4 に沿って事務局から説明を行った ～

(鳥澤委員)

- ・資料 3 の生涯学習についてはすごく大事だと思っており、質問の中に生涯学習において「行政・地域・企業に期待すること」というのがあるが、この「地域」の中に含まれるのかもしれないが、大学が生涯学習に貢献できる役割というものも、こういうアンケートの機会を通して市民の意見を聞かせてもらえればと思う。

5 その他

(事務局)

- ・次回会議の開催は、10 月を予定している。日程については、改めてご通知させていただきます。

12 時 00 分 閉 会

(以上)